

隊はスクン急襲後、主力は道路の南に広がる樹林を潜行し、小貴隊の右翼を超越して、保安隊所在方向に突進し、兵営まで一五〇呎の地点で機関銃小隊に、主力の突進援護を命じ、一挙保安隊を占領した。明号作戦は最後の戦闘となった。

諺に、国のためには血を流し、人のためには涙を流せ、自分のためには汗を流せ、といっていますが、私は戦闘にまた斤候に多数参加しましたが運がよいというか、幾度か死線を越えて、幸いにも命永らえることができました。戦後四十数年の生活の中で苦しい時には軍隊を思い出し、頑張ってきました。永らえた命を大切にして余生を出来る限り永く過したいと思う今日このごろです。

私の従軍記

新編 中村 倉一郎

私は支那事変、大東亜戦争と二回の大戦に参加し、武運強く生き長らえ、現在に至っている。

昭和十四年六月六日臨時召集、仙台野砲第二連隊留守隊に応召（第一補充兵）一二〇人は直ちに北支に出発、担帖（タンク）、天津、石家荘、山西省大原に到着、第二師団第二架橋材料中隊石田（三）部隊に入隊、第二小隊第三分隊一五班に配属された。

乗馬訓練、車馬の訓練など特訓を受け、作戦のため大原駅より乗車、奥地の侯馬鎮駅に下車、隊形を整え、大行山脈に向かう。

北支最大の高山、大行山脈は三三〇〇呎、七月でも肌寒い。強風時は黄塵万丈飛散し、防塵眼鏡やマスクが必要であった。

部隊は山脈の中に入る。一五〇呎もの架橋の輸送行軍で、急坂は山砲隊の二頭立ての馬で引き上げる。下り坂は車輪を桁にロープで結び付けて人馬もろとも滑り下ります。一步間違えれば千尋の谷である。

やがて川沿いに行軍し小高い安全地帯に宿営する。夕方から雨となる。宿舎は民家で雨は次第に激しさを加え、雷雨、風雨が強くなった。

山脈は草木はなく禿の岩山である。山は大荒れとなっ

た。夜が明ける。突然激しい轟音がして、向かいの川がみるみる盛り上がり落下してくる。山津波である。濁流に崩壊した大きな岩石と、流れ落ちてくる岩石が互いにぶつかり、轟音を発し、火花を発する。阿鼻叫喚、修羅場と化す。咆哮は山脈を揺るがす。

部隊は洪水の治まるのを待つて行動を開始、崩壊した道路を復元しながら行軍する。中隊は命により天津市に起きた大水害復旧支援のため豊台に到着し、馬、車、器材等を点検する。

他の小隊は支援のため天津に出動、尽力した。市街は水浸し、特三区は二階まで水である。汽車の線路の両側には土葬された寝棺が山のように取りついている。漆を塗った立派なものもある。大きな石炭の山の上には住民が避難している。十一月十一日、一等兵に進級する。

奥地の友軍への冬物の被服の輸送等も終わり、豊台の駐在地に帰り、北京などを經由し、器材とともに内地に帰還。宇品より汽車で仙台工兵第二連隊留守隊に到着。昭和十五年一月五日、復員完結、五日召集解除となり、戦友等と別れ帰宅した。十五年一月九日、新潟鉄工所内

燃機試運転場に復職した。

昭和十六年十二月八日、日本は西太平洋で米英と戦闘状態に入り、宣戦布告した。鉄工所は軍の仕事にも協力し製造している。駆潜艇の機関を取り付け、海上試運転をする。また高速艇機関も毎月二機を試運転し、生産は残業で多忙を極めていた。昭和十九年三月十五日臨時召集により宮城県石巻市の船舶工兵第一連隊補充兵に応召、当日入隊した。

最上川の川風は寒風で小雪が降る中で、手旗信号や機関の講習、大発の発着の操作の訓練などを受ける。

昭和十九年四月二十五日、暁第二六七一三部隊独立船舶工兵第一中隊が編成される。第一小隊、第二小隊、第三小隊、第四小隊、材料小隊、特艇隊、指揮班である。総員数は三〇〇人。部隊長は古山勝晴大尉である。

私は特艇隊（器材小隊）で、隊長は中畑頼正準尉で班長は轟軍曹、隊長以下二三人である。四月二十七日、船作令により第二十九軍の戦闘序列に編入。五月三日広島県宇品到着。幸の浦に宿営。特艇隊は解散し材料小隊、他小隊に編入される。

部隊各小隊は当分艇隊航行演習を行う。五月二十三日船作令三五五号により南方軍司令官寺内元帥隷下に入る。

「出船命令」同日十七時マニラ丸（一万石）に乗船。五月二十四日門司入港、二十五日輸送指揮官野中中佐乗船、出港。二十三隻の船団は護衛艦に護られて南下する。

敵潜水艦の接近にブザーの鳴ることしきり。六月二日未明バシー海峡南下中、敵潜水艦の攻撃を受ける。船団各所に火柱が上がる。わが駆潜艇の爆雷音。本船は全速力で走航する。六月三日台湾高雄港外に待避入港。六月十日出港。六月十三日ルソン島西側を南下中、魚雷攻撃を受ける。六月十四日蛇行運航でこれを受け、マニラ港外に投錨。六月十八日マニラ港出帆、コレヒドール付近に集結。

三三隻の船団は護衛艦に守られ前進、船内放送でサイパン島の敗戦を知る。六月二十三日にオランダ領ミリ港停泊、二十五日上陸。瀧作令によりボルネオ守備軍司令官の指揮下に入る。二十七日第一梯団（指揮班、第三小隊、材料小隊）は第三ボルネオ丸に乗船。アピ港、バンギ港を経由して七月二日英領ボルネオのサンダカン港に

入港、上陸し丘の上の宿舎に入る。

サンダカンは英領ボルネオ最大の都市で病院、映画館、華僑の商店も多く、賑やかな街で、製材所、造船所、鉄工所もある。材料小隊は機関の修理や大発の整備のため高台の丘の上の民家を宿舎とした。吉田部隊本隊は九月十五日タワオに転進した。日本の戦況は次第に悪化して行き、各地区に敵の空襲がある。レイテ作戦ではわが飛行機は一機もなし。九月二十一日サンダカン桟橋は火災で焼失した。

それより二週間後に街の各所より出火し、次第に燃え広がり、テロ行為も加わり大火災となり、三日三晩燃え続いた。市街は全焼し灰燼と化し、残るものは水洗トイレが各所に見えるだけである。

戦況は次第に悪化し、補給も絶え、私たちは自給のためにタピオカなどを植えて頑張るが、生活は次第に苦しくなるばかりである。ある日突然身体に悪寒が走り、震えが止まらぬ。次第に激しくなり、戦友が毛布を沢山掛けてくれた。マラリヤである。三、四時間過ぎると、今度は熱が出てくる。毛布を取り払っても滝のように出る

汗、シャツは水浸しのようになる。頭を冷たい布で冷やす。熱は四〇度くらいに上がり、意識も朦朧となり何もかも分からなくなる。熱が下がればまた悪寒と震えた。これらを数回繰り返す。葉は妙葉キニーネがあるのだが足りず、身体の衰弱が激しい。余病を併発すれば助からぬ。病院は満員で室内休養ですべて衛生兵まかせである。食事はお粥である。キニーネの苦さで日中は一杯である。幸い一命は取り止めた。

熱帯の気候風土にも次第に順応したのか健康もやや回復して、昭和二十年を迎えた。二月某日、命により大発艇二隻を曳航、曳き船は神龍丸で田中小隊長、沢田曹長、山室軍曹、機関長は私である。他に三人、全員三十数人、夕暮れのサンダカン港を出発したが風雨次第に強くなり、波浪も高く苦難の航行であった。

この行動が敵の知るところとなり、B 24の絨緞爆撃を受け、輸送用ガソリンも食料も大発とともに焼失した。無残にも残る家もない。我らは防空壕や洞窟で耐え忍ぶのみである。五月二十七日早朝、サンダカン港より爆音が次第に近づいてくる。敵艦載機十数機が反転しながら

曳光弾を自分らに向かって射つ。激しい艦砲射撃が我が陣地を過ぎていく。我々は防空壕の中に声もなく耐え忍んでいるのだ。制空権も制海権もなくした現地では何もできない。三八式歩兵銃が十数丁あるのみ。砲撃を止めた敵高速艇九隻はわが眼下に陣を敷いている。

対峙すること実に五時間、敵艇は退去した。小隊長は全員を集合させ、病弱者を奥地の野戦病院に送る。残るものは隊長とともに大塚山に抛り、敵の上陸に備え全員玉砕の覚悟をしたのである。十数日後、田中小隊長は大塚山より前線基地に移動し警備に着く。昭和二十年六月一日付で上等兵になった私は、マラリヤの再発と脚気に苦しむ毎日が続く。千葉伍長も分からぬ病気を苦しめて悩んでいる。七月のある早朝、B 24の爆撃があり、宿舎前方の高台の税関見張り所が大火災を起こした。小隊長らは前方に出動した。千葉伍長と私は火災の下の道路を、伍長は軍刀で私は銃剣で守備に着いた。夜は明け火災も消えた。小隊長らも戻ってきた。行動も終わり平穏である。運よく医者診断を受けることができた。

診察の結果、椰子の実の中の水液で皮下注射を行う。

七日も過ぎると熱も下がり、脚気も次第に良くなってきた。海岸には椰子の実が多くあり、それで救助されたのである。

八月十八日終戦を知らされた。今後は身体を大切にしておいて故国に帰るため頑張ろうと小隊長に激励された。その後はマラリヤと栄養失調で次第に衰弱していく体をいたわり病氣と戦うのである。

武装解除された私たちは十一月十日ごろ、英軍大型上陸用舟艇に乗船、アピ収容所の古田部隊長の木隊に集結した。この時ほど心暖かく安心したことはない。収容所は抑留生活と作業がある。監視隊は豪州軍から英邦軍に代わり、好意的であった。そして二十二年春を迎える。

毎朝の点呼の時、東に向かって拝礼し、敗戦後の故国の復興と隆盛を誓うのである。しかし故国は占領されていて、内容もさっぱり分からないし、何時帰れるのか毎日日の出を拝して、戦友とお互いに励まし合うのである。

三月になると内地帰還の話が聞かれ、みんな希望と期待を得て頑張る。

四月十三日空母葛城に乗艦、思い出深きボルネオよ、

サンダカンよ、戦病死した友の冥福を祈り別れを告げる。

艦は一路故国へ急ぎ、四月二十四日大竹港に上陸し兵学校に収容される。二十五日に復員完結し兵長になる。

各々の家から便りがあり、悲喜こもこもの情景であった。別れを惜しむ一夜は明け、広島駅からそれぞれの故郷へと汽車は行く。

二十八日懐かしい家にたどり着いた。仏間の亡父に帰還の報告をする。やつれた母や妻子、そして弟妹たち、みんな無事を喜び合う。数か月で心身の健康を取り戻した。

戦争と平和　そして国際親善

神奈川県　森田 六郎

戦争とは何ぞや。古来歴史上の文献をひもとけば、それは人類の非道極まりない闘争であり、民族の興亡をかけた戦いであり、また自己の欲望達成のために手段を選ばず、敵対する人々を殺戮し征服するための暴虐な蛮行